

望岳山荘

にて



中嶋 嶺雄

分の一に等しい三十単位前後を取得するのだが、このハードルも大部分の学生が越えている。交流協定はこの十月現在で全世界のトップクラスの大学六十校と結んでいる。

先週は秋田わか杉国体に次ぐ秋田わか杉大会(身障者スポーツ大会)があり、

秋田に立ち上げた公立大
学法人国際教養大学は、本年度が完成年度であり、来春には最初の卒業生が出ることになっている。幸いにして全国・全世界から優秀な学生が集まっていることもあって、就職・進学も大変好調である。全員が一年間の海外留学で卒業単位の四

大学キャンパス前の県営競技場で、皇太子殿下をお迎えして盛大な開会式が催された。長野県の参加者の行進には、大会役員としての私も精いっぱい拍手を送った次第である。その前日の十月十二日(金)午後には皇太子殿下が国際教養大学

秋田と信州の間―「またぎ」を介して

を訪問され、授業を見学されたり、学生や留学生と英語で言葉を交わされた。

光栄なことに皇太子殿下は、すべての授業が英語で行われている国際教養大学にかねてより関心を寄せておられた様子で、大変強

い印象を今回刻まれたようであったが、私たちとすればどんな授業をお見せすべきか、学内でいろいろと検討を重ねた。結果的には、

科学の熊谷嘉隆教授)が手がけてきた秋田の山奥の阿仁地区に残る「またぎ」(主に熊を射止めて生活する狩猟生活者集団)の言語や文化を意味づけ、それがグローバル化といわれる今日の時代にとどう活かされ、受け

継がれるべきかというテーマを設定した。当日は「またぎ」のリーダー格の松橋一美氏に本学へ来ていただき、「またぎ」の言葉をまず

秋田弁で聞き取り、次に標準語に直して採集し、コンピュータでデータ化しつつ、一方でグローバル化

との関係を議論している場面を殿下も興味深く見学されていた。たまたまオーストラリアからの留学生が、

独特の文化で自立しようとしているアボリジニ(オーストラリアの先住民)との比較を語っていた意見を、殿下も感心して聞いておられた。

村合併によって北秋田市となっている阿仁地区は、「またぎの里」として観光化にも乗り出しており、マタギ資料館なども一見の価値があるといえようが、かつて阿仁地区は金、銀、銅を産する日本三大鉱山の一つで日本の殖産興業を支え

た時期もあったという。こうして今回のプロジェクトでは秋田についての新しい知見を私自身も得たのだが、そのなかで印象的だったのは、「またぎ」は秋田をはじめ、青森、山形、

新潟の各県に分布していたばかりか、信州の山奥にも移動して行って、「またぎ」の習慣や技術を伝えたことを知ったことであつた。

秋田と信州は地理的にも遠く、両者間の交通も不便であるけれど、じつは意外に共通項も多い。それらのことを、本欄では時折触れてみたいと思っている。
(国際教養大学理事長・学長 長川松本市出身)